

華嚴三聖像の形成

鎌田茂雄

一 序

仏教において三聖という、円頓戒壇の三聖と、華嚴の三聖とがある。円頓戒壇の三聖とは円頓菩薩戒を受ける時、請する所の和上、羯磨、教授の三師をいう。円頓戒壇の三聖とは、釈迦牟尼仏、文殊菩薩、弥勒菩薩をいうのである。これに対して華嚴の三聖とは、毘盧遮那仏、普賢菩薩、文殊菩薩をいい、澄観の『三聖円融観門』では、「三聖とは本師毘盧遮那如来と、普賢、文殊の二大菩薩是れなり」（大正四五・六七一上）と言っている。

華嚴三聖像とは、『華嚴経』の教主である。毘盧遮那仏（Vairocana）を中心として左右に文殊菩薩と普賢菩薩を配した三聖の造像をいう。この華嚴三聖像は中唐以後、中国において成立した特異な造像であるが、この華嚴三聖像の形成過程を、文物資料と文献資料の両面から追求し、その実態を明らかにするのが本論の目的である。

二 文物よりみた華嚴三聖像

造像としての華嚴三聖像がもつとも分布しているのは四川省であり、とくに大足、巴中、安岳、資中石窟群にその数が多い。

宝頂山石窟

最も大きな華嚴三聖像は、大足石窟群の宝頂山石窟にある。宝頂山は大足県の東北一五キロにあり、南宋の淳熙六年から淳祐九年（一一七九—一二四九）の七十年間にわたって深い谷の岩壁に数多くの仏像が刻された。瑜伽行者の趙智鳳が密教の道場を開き、当時は四八カ所の寺院があったというが、現存しているのは聖寿寺のみである。

宝頂山の華嚴三聖像は巨大な立像で、中央は毘盧遮那仏、左右に文殊と普賢菩薩が立つ。仏像の高さは七メートルあり、中国に存在する華嚴三聖像のうちで最も大きい。大足石窟の一つ北山石窟には華嚴三聖像は存在しない。し

かし、普賢と文殊の像はある。第一三六窟の普賢菩薩は騎象、文殊菩薩は獅子に乗っている。これらの大足石窟の造像には宋代の特色が顕著である。

重竜山摩崖造像

四川盆地の中部の資中県（内江市）重竜山には多くの摩崖造像群がある。東岩、西岩、南岩のほか、北岩の君子泉は、幅約九〇メートルの岩壁に一一九龕、古北岩には幅六〇メートルの岩壁に四三龕が鑿られている。

第一期の開鑿は中唐（七五六—八四〇）、第二期は晚唐（八四一—九〇七）、第三期は五代、第四期は宋代であり、第一期と第二期の分かれ目は会昌の廃仏である。

重竜山石窟の華嚴三聖像は第九三龕にある。龕は幅三・六メートル、高さ三・二メートル、奥行は二メートルで、中央に結跏趺坐した毘盧遮那仏には桃形の背光と頭光がある。左右の壁には文殊と普賢菩薩が刻されている。そばに獅子を引く侍者と象を引いた昆侖奴がいる。この文殊と普賢像にも毘盧遮那仏と同じ背光と頭光があり、さらに頭上に花辨形の宝蓋がある。側にそれぞれ一体の脇侍菩薩が立ち、中央の主尊にも両脇に脇侍菩薩、背後に阿難と迦葉、さらに左右四体ずつの八部衆が彫刻されている。

この九三龕の外壁には後世に補刻された。十余の小龕があり、中に唐の大中八年（八五四）と、大中十二年（八五八）の

造像題記がある。大中八年の題記は、重竜山に残る最も古い題記である。

重竜山石窟の第一五五龕にも華嚴三聖像がある。この龕は、薬師仏のある第一五七龕と様式が似ており、この二つの龕は共に北宋の咸平三年（一〇〇一）、又は治平三年（一〇六六）に造られたものと推定されている。

安岳石窟華嚴洞

安岳石窟の華嚴洞は安岳県赤雲郷にある。県城から約五六キロ離れた箱蓋山の断崖に彫られた洞であり、華嚴洞の外に、般若洞もあり、造像は一五九体、碑刻と題記が四カ所ある。大般若洞の洞内には、南宋の嘉熙四年（一二四〇）に書かれた題記があり、華嚴、般若の二つの石窟とも南宋代に造られたものと思われる。

華嚴洞は高さ六・二メートル、幅一〇・一メートル、深さ十一・三メートルあり、洞窟の後壁の正面に、五・二メートルの高さの華嚴三聖像がある。中央は毘盧遮那仏で、左には獅子に乗った文殊が、右には白象に乗った普賢菩薩が造られている。さらに左右の壁面に五体ずつの菩薩坐像がある。左壁に観音菩薩、右壁に弥勒菩薩が彫られている。

邛峽石筍山華嚴三聖龕

四川省邛峽県の石筍山に華嚴三聖を祀った華嚴三聖龕がある。石筍山の造像は、その題記によって、唐の大暦三年（七

六八)に造られたことがわかる。

この華嚴三聖龕は、高さ四・二メートル、幅は四・八メートル、深さは一・八メートルで、主像の毘盧遮那仏は禪定印を結び蓮台上に結跏趺坐し、左側には六牙の白象に乗った普賢、右側には青獅子に乗った文殊菩薩がいる。象も獅子も大きく、その前には二人の童子が合掌して立っている。

杭州飛來峰の華嚴三聖像

飛來峰は杭州靈隱寺の前にある海拔一六八メートルの小峰であるが、古木が茂り、奇岩怪石が至る所にあり、峰の下には溪流が流れ、天然の岩洞が多い。この岩洞に、五代、宋、元代の石刻造像が三八〇余体ある。最も古い造像は、後周の広順元年(九五二)に造られた五代の造像で、それは青林洞の弥陀、觀音、大勢至の三尊である。最大の造像は、溪流の岩壁に彫られた弥勒像(布袋像)であり、宋代に彫られたものである。

華嚴三聖像是最南の青林洞入口の岩壁に浮彫りされており、華嚴仏会像とも呼ばれている。この華嚴三聖像については、石田尚豊氏の報告がある。中央の毘盧遮那仏は、日本の明恵の「華嚴海会善知識図」の中の毘盧遮那仏の造形と一致するといわれている。脇侍の文殊、普賢の両菩薩は、騎獅、騎象像であり、その前には合掌している先行者と手綱をとる従者がいる。

華嚴三聖像の形成(鎌田)

この華嚴仏会像の龕にはつぎのような題刻がある。

弟子胡承德。伏為四恩三有。命石工鐫盧舍那仏会一十七身。所期
來往觀瞻 同生淨土。時代宋乾興□□四月□日記

この題刻によると、華嚴三聖像は宋の建興年間(一〇二二)に造像されたことがわかる。この銘文中にある「盧遮那仏会一十七身」とは、盧遮那仏を中心として左右に文殊、普賢と二人の従者、背後に四菩薩、四天王、仏龕の外の上部の二体の飛天とをあわせて十七体の造像をいう。脇侍の文殊普賢の二菩薩は騎獅、騎象像で、この両菩薩を振り返りながら先行する合掌童子は善財童子像といわれる。

銘文に記されている造像者の「弟子胡承德」については、揚州阮元編録の『兩浙金石志』巻五につぎの文字が収録されている。

又胡承德、并合家眷属、同発心、刊下生弥勒尊仏、親□三身記、
右在飛來峰

この文によると、胡承德が一家眷属、同じく発心して弥勒仏を飛來峰に造営したことがわかる。常盤大定氏⁽⁷⁾は、題記にある弥勒像は青林洞入口の下生弥勒像ではないかと推定されている。その造像年代については、華嚴三聖像と同じ頃、恐らく同一人によって造られたものであらうと思われる。

『武林石刻記』⁽⁸⁾巻四には、当時の多くの題名が収録されており、「胡宗師等題名」があり胡氏一族が活躍していること

がわかる。胡承德もまた胡氏の一族であり、飛來峰に華嚴三聖像と下生弥勒像を造像したのであろう。

鎌倉建長寺の華嚴三聖像

宋代を代表する華嚴三聖像は杭州の飛來峰石窟の華嚴仏会像である。この飛來峰石窟の華嚴仏会像は、鎌倉時代初期に日本に伝来したと思われる。その一例として宋の仏画の名品として知られる鎌倉建長寺の毘盧遮那三尊像図を挙げることができる。

この建長寺の毘盧遮那三尊像に似たものが高山寺の五聖曼荼羅図である。この図は、毘盧遮那仏を中心として、前方左右に騎獅文殊と、騎象普賢を配し、後方左右に弥勒菩薩と觀音菩薩とを配している。この高山寺の五聖の発想は、華嚴宗の明恵上人によるのではないかといわれている。寛喜元年（一二二九）に高山寺三重塔に安置された五尊が五聖曼荼羅図と同じ形式といわれる。

華嚴三聖像に弥勒と觀音がつけ加えられたことによって五聖曼荼羅図が生まれたのである。このようにみると、五聖曼荼羅図は華嚴三聖像の発展形態の一つともいえるよう。

以上、華嚴三聖像の雕像石刻像などについて、現存せる文物を中心として述べたが中国においては重慶山摩崖造像の題記の紀年が八五四年および八五八年であるので、華嚴三聖像の成立は九世紀の中頃と推定される。

唐末から宋代にかけて造像された華嚴三聖像は、その後、四川から各地に伝わっていった。例えば、敦煌莫高窟の近くに位置する榆林窟の第二窟には、西夏時代（一〇三八—一二二七）に描かれた華嚴三聖の説法図の壁画がある。三聖の周りには供養菩薩、弟子、天竜八部、梵天、竜王などが並び、足許には五彩の雲が棚引き、仏国土の雰囲氣に溢れた説法図壁画である（敦煌研究院蔵）。

西夏はタングート族が建国した国だが、仏教がすこぶる栄えた国で、中でも西夏文の『華嚴經』が現存していることによっても明らかのように、華嚴が流行した国である。榆林窟の説法図壁画は西夏の代表的作品の一つとされているが、この説法図を見れば華嚴三聖が西夏で息づいたことがわかる。なお金代の華嚴三聖像で現存しているのは、山西省大同市の善化寺三聖殿の中にある。

さらに、雲南省劍川県の石鐘山石窟第四窟にも華嚴三聖像の造像がある。開鑿年代は劍川が南詔国の版図となった七九四年以後、すなわち八世紀から九世紀と推定されている。地理的、歴史的に関係の深かった四川の石刻造像の影響を受けて造像されたものと思われる。

なお、文物としての華嚴三聖像については、頼富本宏教授より、高麗仏画の中にあるのではないかという御指摘を受けたので、菊竹淳一・吉田宏志編の『高麗仏画』（朝日新聞社、

一九八一年二月）を見たが、該書には見当たらないので、高麗仏画を精査する必要がある。また日本の鎌倉建長寺蔵の華嚴三聖像図については、石田尚豊氏の『華嚴経絵』を見て頂きたいと思う。

三 文献資料よりみた華嚴三聖像の形成

華嚴三聖の関係について、澄観の『三聖円融観門』には、次のように述べられている。

三聖の内、二聖を以て因となし、如来をなす。果は言想を超ゆれば、且く二因を説く。若し二因の玄微を悟らば、則ち果海の深妙を知る。（大正四五・六七一上）

これによると、文殊、普賢は因、毘盧遮那仏を果とするという。

『華嚴経』では、この三聖をもつて総別智悲の法門を表わすという。普賢は一切衆生の機縁を觀じ、十方に周遍して種々の相を現じ、自在に衆生を救うが故に後得大悲を表わす。これに対して、文殊は、よく諸法平等の理を照すが故に、根本大智を表わす。この智と悲の不二なるところを毘盧遮那仏という。毘盧遮那仏は、文殊、普賢の二聖の総体であり、二聖は毘盧遮那仏の別徳である。

三聖円融について最初に述べたのは唐代の居士として有名な李通玄であるが、李通玄の三聖円融については、華嚴学研

究所長・小島岱山氏の雄篇^⑨を参照して頂きたいと思う。

三聖円融思想の起源は李通玄に求められるが、李通玄の思想をふまえながら、三聖円融思想を完成させたのは澄観である。澄観の著書『三聖円融観』^⑩は李通玄の独創的な三聖円融思想を継承しながら独自の解釈も加えて、三聖円融思想を整理し体系化したものである。

華嚴三聖像の教理学的解釈をした文献としては、李通玄の『華嚴経論』や、澄観の『三聖円融観門』、日本の明恵上人の著書などがあるが、華嚴三聖像の造像についての文献資料は少ない。

この華嚴三聖像を始めて造ったのは誰か、ということとは不明であるが、華嚴宗の第五祖宗密ではないかと思う。それは、宗密の『円覚経道場修証儀』^⑪卷一の道場七門の第六嚴処に、「当中に盧遮那像を置き、両畔に普賢・文殊の二像を置き、これを三聖となす」とあるからである。この三聖を安置し、幡花をかけ、蓮花燈を点じ、百和香を焚いて莊嚴することが記されている。蓮花燈というのは「放燈」という中国の仏教儀礼で用いられる蓮の花の形をした灯火である。

宗密がこのように記録したことが原因となって、その後、華嚴三聖像の造像が四川地方を中心として造られるようになったと思われる。四川は宗密が『円覚経』を入手したところでもあり、宗密と深いかかわりがある土地である。そのため

四川を中心とした石窟に華嚴三聖像が数多く石刻されているのではないかと思う。

次に、『四川通志』巻五十八、金石、重慶府六につぎの記事がある。

盧舍那二菩薩記〔碑目考〕在石照縣之北巖唐長慶二年刺史劉溫撰

これによると石照県の北巖に長慶二年（八二二）に刺史劉温が撰した「盧舍那仏二菩薩記」があったという。これは明らかに華嚴三聖像であり、八二二年には華嚴三聖像が雕造されたことは明らかである。

次に、清の陸增祥編『八瓊室金石補正』巻八十一につぎの記事がある。

造三聖龕記高一尺五寸廣一尺六寸十行九字字徑寸許正書

義營監□□發運等使金紫光祿□夫檢校尚書左僕射□監、門衛大將

軍同□□御史大夫上□□□□□□□□造、三聖龕共七身永為

供養、時武成元年□月十五□記

この三聖龕の造営者の名は不明であるが、三聖を含めて七身の三聖龕を造ったことは明らかである。武成元年は梁の開平二年に当るので、この三聖龕は九〇八年に造営されたことがわかり、府の軍将である都知兵馬使が営造したことがわかる。

華嚴三聖像に関する文献資料は、唐末から五代、宋代にかけてわずかではあるが見出すことができる。成尋の『参天台

五台山記⁽¹²⁾』巻四の熙寧五年（一〇七二）十月二十三日の条に大相国寺を訪問した時の状況が書かれているが、それによると、盧遮那大殿があり、その大殿の高閣には五百羅漢が祀られているという。西楼の上に文殊宝殿があり、師子眷属が具備しており、東楼の上には普賢像があり白象眷属が具足しているという。この盧遮那大殿、左右に文殊宝殿、普賢像の配置はまさしく華嚴三聖像の配置であり、十一世紀後半には三聖像が三聖殿に発展していたことがわかる。

なお、西夏の遺跡の一つである内蒙古自治区の額濟納旗^{ナナ}黒水城から出土した漢文の『大方広仏華嚴経普賢行願品』の冒頭に説法図が描かれており、その中央には頭に宝冠を戴いた毘盧遮那仏、その左右には文殊と普賢の二菩薩が描かれている⁽¹³⁾という。

四 結言

華嚴三聖像の成立は、宗密の生存頃と推定されるので九世紀の初頭と考えて大過ないであろう。文献としては、『円覚経道場修証儀』の宗密の記録から、文物としては、四川省重慶山摩崖造像の八五四年、並びに八五八年の題記によって、九世紀の中頃には四川地方を中心として分布していたことが明らかである。

四川地方を中心として造像された華嚴三聖像はその後、五

代から宋代にかけて東へ伝播し、杭州の飛来峰に石刻像が造られ、金代には山西省の北方の大同善化寺に造像され、さらに西夏時代には榆林窟に壁画として描かれるに至ったのである。

- 1 大足県文物保管所編『大足石窟』（四川人民出版社、一九八一年）。劉長久・胡文和・李永翹編『大足石刻研究』（四川省社会科学院出版社、一九八五年）。
- 2 拙稿「宋代仏教文化の一断面―大足石窟を中心として」（大隅和雄編『鎌倉時代文化伝播の研究』吉川弘文館、平成五年六月二十日）。
- 3 王熙祥・曾德仁「四川資中重龍山摩崖造像」（『文物』一九八八年第八期）。
- 4 彭家勝「四川安岳臥仏院調査」、丁明夷「四川石窟雜識」（『文物』一九八八年第八期）。
- 5 石田尚豊『華嚴経絵』（日本の美術二七〇号、至文堂、昭和六三年十一月）六〇一―六二頁。
- 6 『両浙金石志』巻五に「宋胡承德靈隠造像題名」があり、そこに収録されている。『武林石刻記』巻四にも収録。
- 7 常盤大定・関野貞『中国文化史蹟』解説上（法蔵館、一九七五年四月）八五―八六頁。
- 8 『武林石刻記』巻四、胡宗師等題名、在竜泓洞。
- 9 小島岱山「李通玄における三聖円融思想の解明」（『華嚴学研究』創刊号、華嚴学研究所、昭和六二年）。
- 10 寿山光知「澄観『三聖円融観門』考」（『印度学仏教学研究』第四十巻第一号、平成三年十二月）。
- 11 『円覚経道場修証儀』巻一（統蔵一二八・三六五右上）先須簡処、離於喧雜穢惡、及諸障礙、如前具縁中說也、若得深遶巖谷幽僻林泉、最為殊妙、若在人間、須除去一二尺旧土、以

華嚴三聖像の形成（鎌田）

- 香泥泥地、懸諸幡花、当中置盧舍那象、兩畔置普賢文殊二象、是為三聖、点蓮花燈、焚百和香、諸莊嚴具、唯要潔淨。
- 12 『參天台五台山記』巻四（目仏全一一五、三九四下）
- 13 史金波『西夏仏教史略』（寧夏人民出版社、一九八八年八月）一八二頁。

〈キーワード〉 華嚴三聖像、宗密、四川

（愛知学院大学教授・文博）

掲載されなかった諸氏の発表題目(1)

成唯識論西明疏について

橘川智昭（東洋大学大学院）

華嚴教学における「事」の概念

織田顯祐（大谷大学）

澄観の華嚴教学と『法華経』

吉津宜英（駒沢大学）

Meg'ris における仏教展開の一考察

則武海源（立正大学）